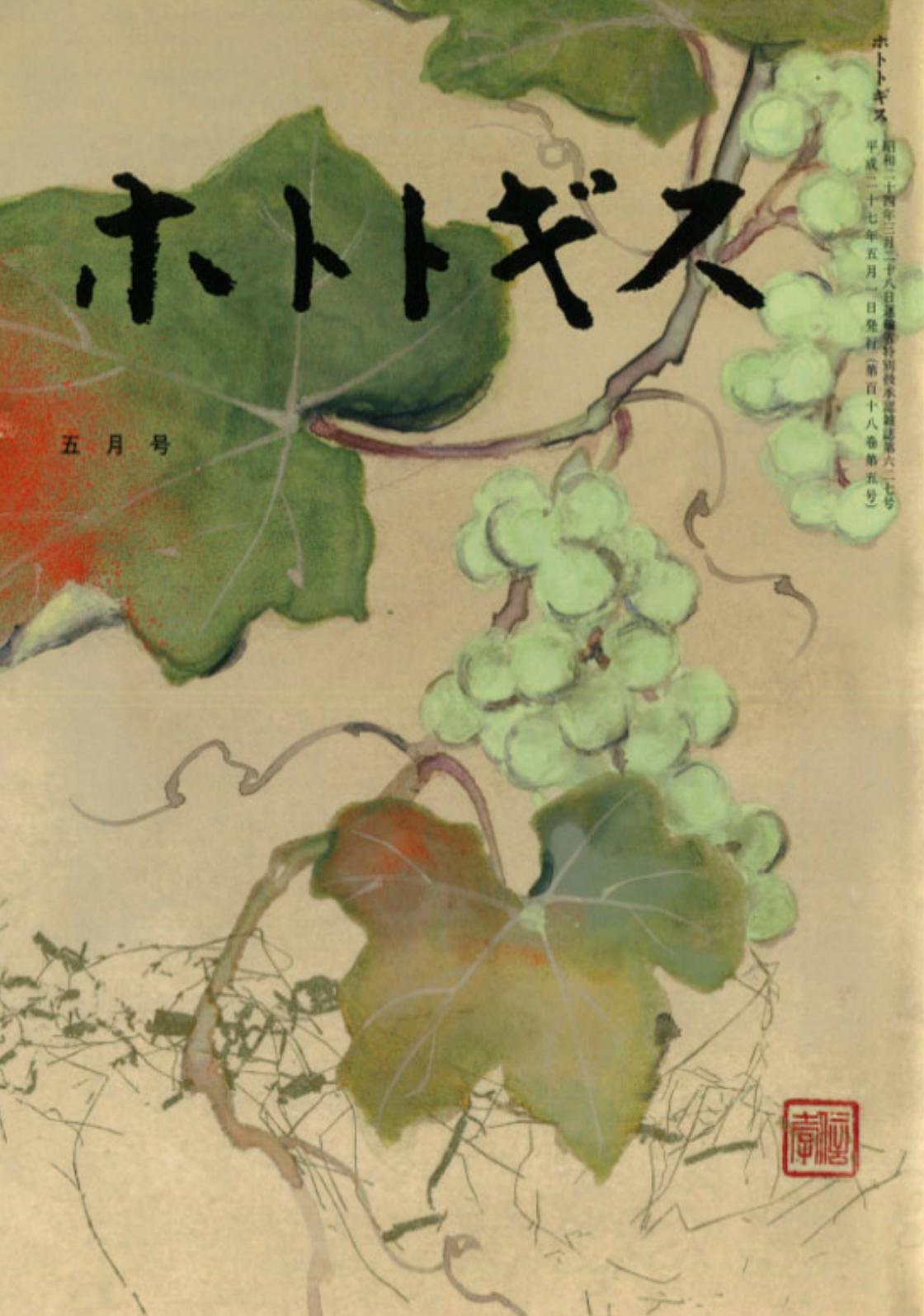


赤トトギス 昭和二十四年三月二十八日運轉者特別檢査記録第六二七号  
平成二十七年五月一日発刊（第百十八巻第五号）

# 赤トトギス

五月号



## 俳句随想〔三百九十五〕

汀子

虚子記念文学館の一年のイベントの一つに虚子生誕祭がある。虚子忌があつても虚子生誕祭は虚子記念文学館しかして居ない。今年は虚子の誕生日の二月二十二日は、淡路島の洲本で開催される「第六回永田青嵐顕彰俳句大会」をこの日に予定していたので前日の土曜日の二十一日に予定をした。当日、百人を超える方々のお申込みを頂き、大盛会になった。イベントとして、京極杷陽展の締め括りになり、杷陽さんと親しかつた三人娘（三人老女）の鼎談があつた。千原叡子さん、岩本桂子さん、それに私汀子の三人である。打合せも無いまま、それぞれの懐かしい思い出を始めとし、余り知られていなかった逸話も飛び出して、大変面白かつたと評判を頂き、三人老女はほっと胸を撫で下ろした。私と叡子さんと安原葉さんの三人は、その足で次の日のイベントのある淡路島の洲本へ旅立つた。その後、二日間、「永田青嵐顕彰俳句大会」に出席した。ご講演をして下さった安原葉さんのお話は要を得た永田青嵐顕彰俳句大会に相応しいご講演で出席された方々の共感を呼ぶ素晴らしいものであつた。なお、泊めて頂いたホテルニュー淡路の木下ご夫妻の目を見張るようなご好意の数々の一つに、私の句碑建立があり、風光明媚な淡路島の城趾の永田青嵐の句碑に守られるような位置に建てて頂き、二月二十三日朝、除幕式が挙行された。この句碑の誕生に力を尽くして下さった方々に感謝し、引続き吟行会の淡路人形浄瑠璃を見学、帰宅した。

旬日記 汀子

平成二十六年五月三日 菅屋ホトギス会

柳絮飛ぶ頃の蝦夷地へ旅路あり  
春惜む頃 談終へて又集ふ

五月五日 ロイヤル吟行会

湖といふ大景 絞り柄の花

五月六日 下萌句会

若楓影を広げし水面あり  
定まらぬ陽気 夏めく日も近し

一雨に 甦る色 若楓

松蟬や聞かざる如く聞いてをり  
いつの間に夏めく旅となりしかと

五月八日 清文社

お国ぶりとして粽 揚げ来られけり  
金雀枝へ視線つなぎてゆく旅路

金雀枝や明日の旅路を思ひつつ

軽暖の油断 軽装なりしこと

五月九日 工業倶楽部

みよし野の木肌の白し 葉の日  
これよりは夏めく旅と心して

ふと影に入りしよりの若葉 冷え

五月十日 四国ホトギス同人会

この若葉 明りに旅の包まるる

五月十一日 四国ホトギス俳句大会

幾度も訪ひし 曾遊の街 涼し

五月十三日 大阪倶楽部

運転の 視野に 全き 桐の花  
何よりも 快晴 夏の 旅路かな

旅といふ 予測なき 視野 余花に 会ふ

まだ夏の 入口にして 心地よく

桐の花 昨日の旅は もう 過去に

五月十三日 綿業倶楽部

癒えませと言伝てばかり 牡丹剪る

快晴に 忽ち 牡丹 咲き 終へし  
五月十五日 クラブ合同

草笛も 風に 消されてしまひ けり

離陸する 芽 天流しの 大地 置き

五月十六日 アネモネ句会

きつかけは何はともあれ 会 涼し

夏めける 開放感に 似て 親し

朝の間の 仕事 片づく 涼しさよ

明日の旅は 雪予報 蝦夷の 夏

五月十七日 北海道ホトギス同人会

白樺の 若葉 つぎつぎ 抜け 大地

どこまでも 続く 連翹 振り かな

蝦夷にして 余花の名残も なかり けり

遅れぬしとは 北国の 夏のこと

五月十七日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

蝦夷はまだ 夏遠ざけてをりに けり

右折して 左折 五月の 蝦夷の 旅

旅衣 脱いだり 着たり 蝦夷 五月

夏も 雪降るを 納得せしは 蝦夷

五月十八日 北海道ホトギス俳句大会

邂逅の 句碑を抱きて 花は 葉に

なほ 奥に 白樺 新樹 そよぐ 森

みどりとは 何とやら ほかた ンぽ 野

又 踏んでしまふ た ンぽ ば た ンぽ 野

五月十九日 アサヒカルチャー

夏寒き 北国の 旅 遠くして

どこまでも そよぐ 新樹に 癒さるる

五月二十日 有恒俳句会

更衣して 忘れ来しもの の あり

軽暖の 旅に 心を 置いて 来し

風強きことを 常とし 蝦夷の 夏

軽暖の日は 過ぎて 易し 旅 帰る

又 次の 計画 過ぎて して 旅 祭

蝦夷は 夏とは 快晴の 旅 心

五月二十日 無名会

遠くより 見し 桐の花 見失ふ

薬の日とて 欠かすこと 無きものも  
夏風邪の やうやく 抜けし 一人 かな

五月二十一日 夏潮句会

客人に せめて 涼しき 雨上 がり

夏の 雨と しや 降りと 聞く 電話口

邂逅の 話 弾める 涼しさよ

蚕豆の 皮 無き 如く 供さるる

青芝の 大樹の 影の 濃かり けり

蝦夷の 夏寒き 旅路を 置いて 来し

五月二十二日 きさらぎ句会

油断は して ならぬ 体 調 薬の日

歳月 しての びよるもの 薬の日

新樹 冷北の旅より つづくもの

五月二十四日 句会と講演の会

わが母は 江戸つ子 三社 祭 来る

快晴 や 三社 祭の 一 部 分

五月二十九日 稽古会同窓会

集ふて ふ力 漲る 会 涼し

友と へ耳 遠くとも 汗 涼し さよ

友老いぬ 我も 老いしか 露 涼し

快晴の 道 迷ひしと 汗 涼し

露 涼し 老と思ひし ことは なし

手の 皺を さすり して 汗 握り かな

皆 無事に 集ひし 仲間 汗 涼し

五月三十日 時雨句会

風 五月 乱るる 髪も その ままに

旅衣 吹かれて 蝦夷の 五月 かな

惜しまるる 人柄 なりし 露 涼し

咲かせたき マーガレット は 野の花 よ

植糸 足して マーガレット も その 中 に

邂逅の 友の 老いたる 業 平 忌

五月三十一日 菅屋ホトギス会

一 葬儀 終へて 短夜 なりし かな

卯の花に いつか 迷うて みる 山路

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年五月一日 蕉心会

惜春の味とは元祖カレーパン  
蝌蚪泳ぐ三角池を丸くまるく  
メーデーといふ空の青水の黒  
その中の一匹蝌蚪を辞めたくて  
蝌蚪の 国外務大臣出張中  
桜葉降るより空を語り初む  
ネクタイを先づ褒めくれし美女うらら  
うららかに福島名菓携へて

五月三日 菅屋ホトギス会

嗚呼坂井建よ憲法記念の日  
春惜む富士全容を明かさざる

五月四日 野分会菅屋例会

東下り 三十二年 初鯉  
八金に惚れし昔や初鯉  
母の日や遺志継ぐ君の輝きて

五月四日 虚子記念文学館投句

花桐の香に理事会の進みゆく

五月六日 伝統俳句協会関東支部大会

冷んやりとひんやりと夏来りけり  
塔すくと夏ゆらゆらと立ちにけり

五月八日土筆会

稲城野に通ひし昔袋掛  
抜きん出て野蒜の花は風を恋ふ  
袋掛果実の里の色鎮め  
薪能闇新しく塗り替はる  
その中の虚子は金春薪能

五月十一日 四国ホトギス同人会 大会

露涼し虚子の息吹を感じつつ  
鯉幟伊予の山並撫でゆけり  
今佇てり虚子の故郷てふ薄暑  
伊予の空山藤の香に降りて来し  
西ノ下にルーツ辿りて夏に入る  
城若葉戦無き世の色として  
濠涼し五羽の醜い家鴨の子

五月十二日 カトリック新聞選者時

平成の世に城といふ朧かな  
山法師咲けば丹波に一会かな  
祭髪二人駆けゆく交差点  
浅草に神輿と粋が集ひけり  
祭見のけんくわをさめる巡査かな  
瀬戸内の波を飛び出す鯖の青

五月十日 朝日カルチャー若草句会

鯉のぼり青き地球を見下ろして  
五月十五日 NHK「俳句ぞく」収録

初節土佐の成長の早かりし  
初鯉土佐の活気に耀られゆく  
ラベンダー北国の空淋しめず  
初節句母になりたる覚悟かな  
北国に一会の待てるラベンダー

五月十五日 登高会

涼しさを通り越したる蝦夷の旅  
夏の旅気温一桁てふ蝦夷地  
更衣して後悔をしたる旅  
着陸す蝦夷の若葉を傾けて  
白樺に涼しく旅の始まれり  
余花に会ふことも親しき蝦夷の旅

五月十七日 北海道ホトギス同人会 大会

邂逅に旧交に蝦夷旅涼し  
想像を絶する冷えや蝦夷の夏  
花は葉に句碑の歳月語りつつ  
これが夏ほんたうに夏なんですか  
老鶯に広げられゆく蝦夷の空  
蝦夷訛もて老鶯は語部に  
明日からは江戸の暑さといふ生活  
離陸する茅花流しに押されつつ

五月二十日 「北國文芸」選者時

わが句歴三社祭に始まれり  
とびを飛ぶ宇宙目指してゐるやうに  
黄海の海戦知るやとびを飛ぶ  
つばめ魚鱗の長きが耀られゆく

五月二十七日 若水句会

松落葉大邸宅を埋め尽し  
豆飯を嫌ふ息子と好む夫  
松落葉季節割がしてをりにけり  
豆飯の塩加減とは夫の技  
松落葉故郷に一訃音あり

五月二十八日 目黒学園句会 伯母の葬儀の為不在投句

菖蒲勢る息子二十歳となりにけり  
袋角鹿せんべいに集まれり  
都心には都心の雅風薫る  
薫風に召されし伯母でありにけり  
袋角古都の隅まで知り尽し  
あやめぐさ三百年の軒下に

五月三十一日 菅屋ホトギス会

これよりは伯母の梯花卯木  
卯の花の色に喪心引き寄せて  
暮遅し喪心使ひ切つてをり

# 雑詠 廣太郎 選

病人に今年の時間はじまりぬ 東京 今井千鶴子

人日の病院食は菜めしなる 同

お菓の白く小さく寒かりし 同

クリスマスイブ病棟の灯よさらば 奈良 古賀しぐれ

三分の一の胃の腑に屠蘇しむる 同

日脚伸び祈りの道をゆく散歩 同

柳川や炬燵の下に川の音 東京 大久保白村

岸の夫写すは炬燵舟の妻 同

嫁に入る狐乗りくる炬燵舟 同

まだ炬燵舟に揺られてゐるやうな 熊本 岩岡中正

楽しくて夢の中まで炬燵舟 同

いま覚めしばかりの鴨のこゑであり 同

竹馬の一步大きく近寄り来 東京 阪西敦子

竹馬や夕日の色の子をのせて 同

竹馬の風に凭れてゐたりけ 同

悴みし心を解くカオルかな 神戸 涌羅由美

寒月のため漆黒の空のあり 同

短日のペダルを強く速く漕ぐ 同

山眠る峽の寒村かき抱き 東京 内藤呈念

日記買ふ電子の文字は消え易く 同

蠟涙に似て臘梅のしづくかな 同

白菜の縛られ畑に羅漢めく 同 橋本くに彦

踏み込みし一步の音や霜柱 同

枝衝へ園の鴉も年用意 同

障子閉め一書に向ひ合ふ静寂 神戸 山田佳乃

日時計は進みベンチの冬ぬくし 同

初霜の降りくる窓のやじろべゑ 同

揺れ揺れて揺れとどまりて浮寝鳥 龍ヶ崎 今橋眞理子

木の扉押して降誕祭用意 同

天草の闇深々と聖夜待つ 同

初春や志へとまつしぐら 長岡 安原 葉

初夢の快晴さめて大雪に 同

初夢に会へざりし富士仰ぐ旅 同

懐手して沖ばかり眺めをり 香川 湯川 雅

寒林や消えさうな背を追へば雨 同

踏み減りし踏絵といふを目の当り 同

着ぶくれてゐる不自由を選びけり 渋川 山本素竹

落葉踏むもつと大きな音させて 同

太陽をちりぢりにして鴨過ぎる 同

音楽に乗りて虚心のスケータ― 神戸 千原叡子

スチームや中世の色濃きホテル 同

天空の城のせしまま眠る山 同

# 雑詠句評（四月号より）

公次・仁義・くに彦  
佳乃・純也・一步  
雅・霜衣・しげ人  
さい雪・廣太郎

田村元逝き永田町冬めける 東京 大久保白村

## 話合ひ終へて漸くおでんかな 松本 唐澤春城

「漸く」という措辞から、相談がまとまるまで少し時間がかかった様子。しかし、その後は「おでん」を食べながら歓談をされるようなことから、自ずとその場所なども想像され、話合いの内容は堅苦しいものではなさそうである。「おでん」という季題の効いた一句といえよう。（公文）

政治関係の話合いをされていたのだろうか。そうなると結構堅い内容も想像出来、その時は「おでん」を食べながら、というわけにはいかないだろう。そして結構長時間に及んでいた事も想像出来、漸くそれも終り、その後はぐっとくだけて楽しくおでんを食べているという、その場面の転換が面白い。（廣太郎）

永田町は、東京都千代田区内の一区域の名称である。そしてここには、国会議事堂・首相官邸なども存在し、永田町とは、日本政界の中心部としての俗称にもなっている。掲句は、政界における「二巨星墜つ」の影響の大きさを詠んでいる。政界に長老議員として君臨していた田村元が亡くなった。それ以来、永田町界限には、冬めいた凋落の雰囲気漂っているばかりだという。作者は、政界もまた長く厳しい冬の時代に入ったのであろうかと、ふと危惧の念を抱いたのである。（仁義）

衆議院議長として日本の政界に多大な影響を与えて来られた田村元氏は、我々にとってはホトトギス同人として、俳句の世界で親しくお付き合い頂いていたが、去る平成二十六年十一月一日に惜しまれてこの世を去られた。作者は俳句界、政界共にお付き合いになつておられ、最高の悼句となつた。（廣太郎）

天地有情

子選

良きことも良からぬことも去年今年  
 やや瘦せしこともめでたく春を待つ  
 雪深きわが家をはなれ来し旅路  
 大雪の家路となりし旅帰り  
 大文字欠けゆくまでの静寂かな  
 鯛のヘアピンカーブ鳴き移る  
 山の香の風海の香の風も冬  
 一穢なき紙を選びて歯朶を敷く  
 冬めいてきたる明るさ夜の銀座  
 雑踏の冬めく音の中に居り  
 青空に心吸はるる冬木立  
 オリオンの離れ初めたり冬木立  
 冬ざるる祈りにも似た静けさに  
 聖夜の灯心の隅を照らすかに  
 必ずや銀杏黄葉に野の社  
 大冬田より津軽富士天へ反る  
 黄落のしきりにいのち惜しめとや  
 年果ての一切水のごと流れ

東京 今井千鶴子  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 神戸 立村霜衣  
 同  
 静岡 須藤常央  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同

のぞきたきおわら踊の笠の内  
 美しや亡者履きゐる踊足袋  
 振袖のふれんばかりに雪道を  
 雪道を行く振袖のはなやげる  
 竜の絵の羽織着流し七五三  
 母の亡き孫に求めし羽蒲団  
 クリスマス退院といふプレゼント  
 五千歩にまで試歩の伸び日脚伸ぶ  
 年用意稲穂匂へるもの買ひて  
 冬の月船の霧笛の上に出る  
 いまはただ枯れ行くものと共にあり  
 何もすることなきいまは枯木見て  
 足音を消して落葉を踏む音に  
 落葉踏む音のときどき消えもして  
 薬効かざりし寒夜の鳩時計  
 淋しくて霧夜の灯つけて寝る  
 母許に尽きぬお喋り日短  
 まどろみの覚めて車窓の暮早し

神戸 後藤比奈夫  
 同  
 我孫子 副島いみ子  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 奈良 古賀しぐれ  
 同  
 神戸 後藤立夫  
 同  
 群馬 中杉隆世  
 同  
 熱海 嶋田一步  
 同  
 熊本 永野由美子  
 同  
 東京 高濱朋子  
 同

## 師 走 稲畑汀子

柳川で開催される九州ホトトギス大会が今年最後の旅になった。年末まで未だ何かと出掛けなければならぬ仕事があるが、一つずつしていけば何とかなるような気がしてきた。

九州から帰ると、次の日は今年最後の朝日カルチャーの教室がある。その準備は出来ているし、この日は、皆さんに『今年一年を振り返って』という題で一人一人に話して頂くことになっていて、先生は時々相槌を打てばよい。誰もがすっかり話して下さるので楽しみでもある。

今年最後の教室は殆どが出席して一杯になった。昨日の九州ホトトギス大会に来られていたTさんも出席しておられる。

先ず、少し旅の話を始めることにした。いよいよ皆さんから今年を振り返って、また新しい年にこの教室でしてほしい事があれば言ってみると、質問も交えて皆の話が始まった。

健康で出席出来た喜びをいう人が多かった。三分の一位が済んだ頃、一人がメイクをもつと次のように質問を始めた。

「先生は肌が美しいけれど、どんなお化粧品をして居られますか。

教えて下さい」

「えっ」

意表をつかれてたじろいだ。

「私は綺麗な肌ではありませんよ。がさがさの肌ですが悩む暇がないから諦めているのですよ」

……と切り出したのであったが、急に話したくなった。

「じゃー、私の毎日のお化粧品のお話をしましょう。……」

一息ついて話し始めた。

「私は肌が汚くて悩んでいたのですよ」

「へー……」

「今から何十年前か忘れましたが、鷹羽狩行さんと対談をしたことがありました。その対談を企画した方は化粧品に関係している方で、その時、お土産として『雪肌精』と書かれた青い瓶の化粧水を下さったのです。その日から私はずっとその化粧水を使っているのです。何処にでも売っていますよ。それから、桑田詠子さんが私に、これを一滴か二滴、お肌に塗るようにと『ソーマ琥珀』を毎年のように下さいます。今では五滴ほど使っています。詠子さんが亡くなってしまってもずっと家にあつたのですが、遂に瓶の会社を探して買ったところですよ」

「へー……」

私の話を聞きながらノートに書き留めているのが目に入った。

「その上に、私の同級生で親友の節っちゃんが阪神淡路大震災でお孫さんを亡くされ、それから間もなく彼女も亡くなったのですが、彼女が教えてくれた『カバマーマク』という白粉をつけるようになって、十年一日の如く続けているのです。終り」

「私の肌は綺麗ではないですが、何でもこんなことを話しているのですね。さー次の方、今年を振り返ってお話して下さい」

朝日カルチャーの二時間はあっという間に過ぎた。

仕事如山積みそのままどんどん時間が過ぎて行く。電話が鳴る度にどきつとする。

「先生！ あのお原稿はいつ頂けますか？」

「はい！ 何時までが限界でしょうか」

「今すぐにでも頂きたいのですが……。では、今週中にして頂いて月曜日に届けば有難いのですが」

「分かりました。間に合うようにファックス致しましょう」

明日からまた東京である。鞆に仕事の原稿を残らず入れた。

受話器を置くと、ホトトギスの一行さんから電話が掛かった。

「先生ー 予定表には、明日から上京と書いてありましたが、『天地有情』の選が済むのは何時になるでしょうか？ 年末なので大日本印刷へ早く入れなければなりません」

「分かっていますよ。でも能力の限界があるのだから。努力する

「しかないでしょう」

「よろしくお願いたします」

「済みませんね」

泣きそうな一行さんの声の電話に頭を下げた。

